「質的心理学研究の足下を見直すため、あらためて古典を読む―科学としての質的研究の立脚点は二つ」

質的心理学研究、第 15 号 pp.223-225, 2016　新曜社

続く書評は、葛西俊治氏である。臨床心理士養成大学院に所属する葛西氏は、実験心理学の出身であるとともに、精神病者のダンスセラピーを主導する研究者かつ実践家である。彼は一般性が求められる実験心理学と、個別事例に対する臨床実践の狭間で格闘してきた。同様の事態に置かれている読者も多いことと思う。個別と一般をいかに接続するか。質的研究に関係する以上、不可避の問いである。高木廣文『質的研究を科学する』(医学書院)を手かがりにして、葛西氏にこの問題の一解法を提示してもらおうと考えた。

高木氏の著書には、質的研究者としての苦悩が散見される。高木氏の苦悩は質的研究者の多くが共感できる(すべき)ものだと思われる。諸々の古典を紐解きつつ、葛西氏はこの苦悩から脱する道を示唆してくれる。読者に期待することは、高木氏と現在の苦悩を共有しながら、葛西氏が提示する複数の古典と向き合うことである。彼が提示する古典は、社会科学、科学哲学を含む広範な地平を持つ。質的研究を行なうことは、科学の原点に立ち戻ることまでも要求する、真摯な営為であることをも併せて実感されたい。

科学としての質的研究の立脚点は二つ

葛西俊治

エビデンスに基づいた医学(Evidece-based Medicine)では、疾病や治療を数量的統計的に把握することによって適確な対処を目指すのに対して、看護領域や心理臨床領域などでは、患部ではなく患者として苦悩する人間を相手として適確な対処を目指している。前者は身体という物的実質に関わる＜物質科学＞であるのに対して、後者では患者・来談者の語りに耳を傾けて状況を理解する人間諸科学のアプローチをとる。

最近、高木廣文(2011)による『質的研究を科学する』(医学書院)を手にする機会があった。「質的研究は科学であり、エビデンスをもたらすものである」と主張する点において評者も同感である。しかし、＜物質科学＞に基づいて質的研究を論じるのではなく、あらためて、例えばヴィルヘルム・ディルタイ『解釈学の成立』(ディルタイ(久野訳)，1973)における「了解」を基本として、社会学者マックス・ウェーバー『理解社会学のカテゴリー』(ウェーバー(林訳)，2002)における「理念型 Idealtypus」のように、現象の理解モデルの提起によって人間諸科学の立場から議論する必要がある。高木氏は第3章「質的研究の難問を解決する―主観的解釈とは非科学的か」で、フェルディナン・ド・ソシュールの一般言語学(ラングとパロール)ならびに竹田青嗣の現象学的観点によって、「言語の不定性・多義性」「会話の信憑構造」という、語りを形作る言葉そのものの不安定さと安定さを提示しているが、その底流にはそうした道筋がある。

ところで、＜物質科学＞とは物質的現象に馴染む「多事例・少要因」事態を扱う数量的統計的集約を手法とする特殊科学であるが、実はそれらは、人間が関わる「少事例・多要因」的で複雑な現象世界に取り組んできた人間諸科学の知的考究の基盤にある「アブダクション(abduction)」と「提喩的了解」とに基づいていると、観点を今一度コペルニクス的転回する必要がある。

人間が関わる現象世界の基本的理解は、評者にとって、a)「生活者はアブダクションという推論に基づいて生きている」、b)「語りによる内容は提喩(synecdoche)によってすでに＜一般化＞されている」の2点に基づくものである。こうした視点に立つと、高木氏の第5章「質的研究の結果は、一般化できるのか」、第6章「最後の難問―アブダクション」の問題は、次のようにして乗り越えることができる。

まず、質的研究によって示される理解モデルがどのような状況にまで「一般化できるか」は、モデルの汎用性に関わる議論に過ぎない。そこでの真の問題は、例えば「物は落ちる」と言うとき、気がつくと下に台があったり紐で吊られていたり磁力の反発で浮いたり等によって、そうした命題は自然界でも全く一般化され得ない事実を見落としている点である。カール・ポパーを待つまでもなく帰納法は蓋然的な主張に留まるし、演繹法も「その物は(落ちないような条件が全て除去された場合に限って)落ちる」ということであって、命題のトートロジー的性質によってのみ了解されるに過ぎない。そのため要因間の関数関係を扱う＜物質科学＞は、例えば「有意水準5%」なる統計的操作を借りてJ.S.ミルが『論理学大系第3巻論証と帰納』(ミル(大関・小林訳)，1958)で言う「自然の斉一性」へ擦り寄り、擬似的に命題を提示するに留まるといえる。

さて、(b)の＜一般化＞に関わる「提喩」(佐藤，1978)とは、欧米の中心的な比喩論あるいはロマン・ヤコブソンによる二つの失語症と隠喩・換喩の二大比喩との関係化によって見失われてしまった比喩形式である。「人はパンのみにて生きるものにあらず」でのパンは、食べ物の一つである「パン」を用いて「食べ物」という類を示し、また「花見に行く」先はサクラであるから、類を指し示す「花」という言葉によって「サクラ」という種を言い表すなど、類と種別、類と個別との相互循環的な比喩である。こうした特徴をもつ提喩は、しかし、単なる文章表現上の修辞(レトリック)には留まらず、これによって個別事例がすでに＜一般化＞された事態として了解される現場がある。評者が関わる臨床心理士養成課程では、ケース・カンファレンス(事例検討)の場があり、来談者の語りの内容・状況を面談者が報告し質疑応答が行われる。面談者は「Aさん」と呼ばれる来談者本人を思い浮かべながら応答するが、その話に聞き入る院生や臨床心理士の教員等はおおむねAさんには会ったこともなく、結果として「Aさん･･･のような人」についてそれぞれが勝手に専門性や経験の有無などによって思い描く「類的な」人物像・臨床像に依拠して質疑を行なう。このように、「その人」(個)と「そのような人」(類)についての言説と理解が相互交換的に行き交う場での了解のあり方を「提喩的了解」と呼ぶ。たとえば「Aさんはなぜそうしたのか」といった理由の推論は、各自の人生経験と専門的知識(精神病理や異文化など)に基づく類的な推論(アブダクション)によって百花繚乱となり得るが、その落ち着き先は同業的職能集団(実際のあるいは理念的な研究者集団:マトリックス)における「了解」のもと、その内容の真偽の判断に先だって、暫定的な妥当性をもつ理解モデル群として保持される。つまり、事例検討や事例研究とは(a)アブダクションと(b)提喩的了解によって構成される質的研究として位置づけられるのである。

ところで、チャールズ・サンダース・パースが唱えたアブダクションとは、「掘っていると魚の化石が出てきたので、そこはかつて水底だった(と考えられる)」「歴史的遺物などがたくさんあるので、誰も会ったことはないがナポレオンは実在した(と思われる)」といった日常的な推論形式である(伊藤，1985)。これはGTA(グランデッド・セオリー・アプローチ)における「最終的なコア概念への到達･･･」などへと極小化されるべきではなく、質的研究の本質に位置するものである。看護や心理臨床の現場において患者や来談者が「なぜそのように考えたか、振る舞ったか」の把握とは、当該領域の専門家や研究者であるという「位置づけの差異」に基づいて、対象者自身のアブダクション構造とその理由や背景を、当該専門家集団の観点において把握しようとする営みであり、研究自体がアブダクション推論に基づくという点での「同型性」を有している。なお、この「同型性」とは(a)(b)という人間の思考と了解の方法として同型的であり、高木氏の著書で頻繁に唱えられる「人間の心と脳構造の･･･同型」の実質的機能を構成するものである。

人間が作り出す現象とそれに関わる人間諸科学とは、「人間の斉一性」を保留することを前提とし、それ故に生じる個々人ならび社会的現象の本質的な多様性、そしてそれと同時にその類型性とを、アブダクションと提喩的了解によって提起する。そのように当該専門家集団によって提起される「仮説」「理論」はその限定的現象場面を把握する理解モデルであり、専門家集団内外に対してe-vid-ence(外から-見える-もの)としての基本的地位を当初より獲得しているといえる。

引用文献

ディルタイ，W.（久野昭訳） 1973 解釈学の成立 以文社
伊藤邦武 1985 パースのプラグマティズム 勁草書房
ミル，J. S.（大関将一･小林篤郎訳） 1958 論理学大系第3巻論証と帰納 春秋社
佐藤信夫 1978 レトリック感覚 講談社
ウェーバー．M.（林道義訳） 2002 理解社会学のカテゴリー(新訳版) 岩波書店